

次の文章は、1858年に合衆国の新聞「ニューヨーク-デイリー-トリビューン」にドイツの思想家マルクスが寄稿した記事の一節である。

「それで私は最近十年間に、ドイツ人、とりわけプロイセン人ほど、この方向に巨大な前進をとげた国民がほかにあるとは思わない。読者が十年まえにベルリンを見たとするば、今日もとの姿を認めることはできない。ベルリンは凍てついた練兵場から、ドイツの機械工作のそぞうしい中心地にかわった。もし読者がプロイセン領ラインとヴェストファーレンを通過するならば、思わずランカシャーとヨークシャーを思い出すであろう。」

19世紀前半、当時の先進工業国であったイギリスは、東インド会社の貿易独占権、穀物法、航海法などを次々と廃止し、中南米・中国に対しては新たな貿易政策に沿った動きを展開した。一方、経済的に遅れをとっていたドイツは、19世紀にイギリスとは異なる政策を標榜し、「(イギリスの工業中心地である)ランカシャーとヨークシャーを思い出す」といわれるほどの目覚ましい経済発展期を迎えた。また、同じく後発であった合衆国も、ドイツと同様にイギリスとは異なる政策で経済の成長をはかり、成果を挙げた。しかし、その過程においては、ドイツでは新興勢力と旧勢力の、合衆国では経済基盤を異にする2つの勢力による経済政策をめぐる対立があった。

以上のような19世紀の欧米諸国の状況を踏まえて、19世紀前半のイギリスの貿易政策の転換について、その背景や中南米・中国に対する動きを含めて明らかにするとともに、19世紀のドイツ・合衆国がイギリスに対抗して採った経済政策について、両国国内での利害対立、および19世紀末に見られた経済政策の成果にも触れつつ600字以内で説明せよ。その際に、下記の7つの語句を必ず1度は用い、その語句に下線を付け。(40点)

公行      カニング      第2次産業革命      南北戦争      ユンカー      リスト      ビスマルク